

第03回 マルチメディア表現と技術

情報技術の発展と社会の変化

～ 生成された映像は、どこまで本物として扱ってよいのか ～

山梨大学 教育学部 准教授

稲垣 俊介



3回連続で考えてきたこと

情報技術は、便利さだけでなく、
何を本物として扱うかも変える。
今日は「生成」を考えます。

今日まで考えてきたこと

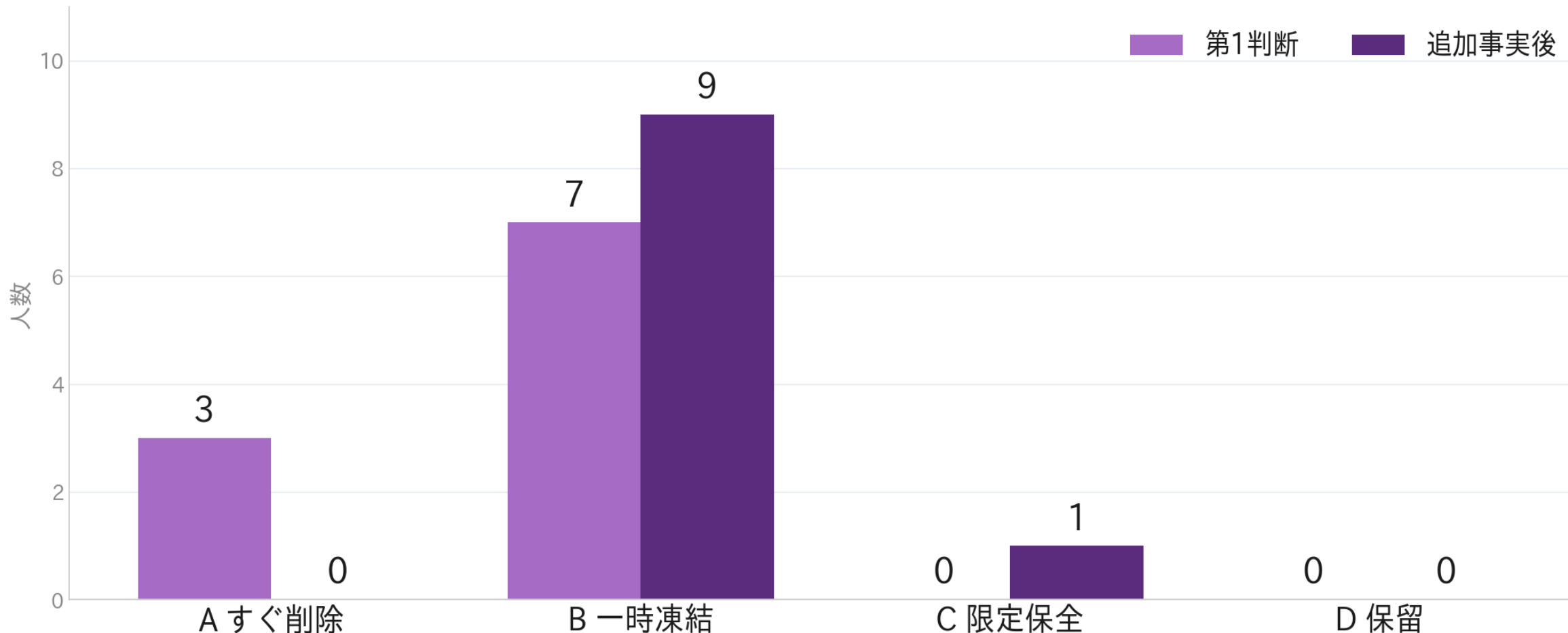
- 1 第1回:情報をどう残すか → 保存条件の設計
- 2 第2回:情報をどう見せるか → 発信条件の設計
- 3 第3回:情報をどう生成するか → 生成条件の設計

次回以降は「情報をどう伝えるか」を考えていきます。

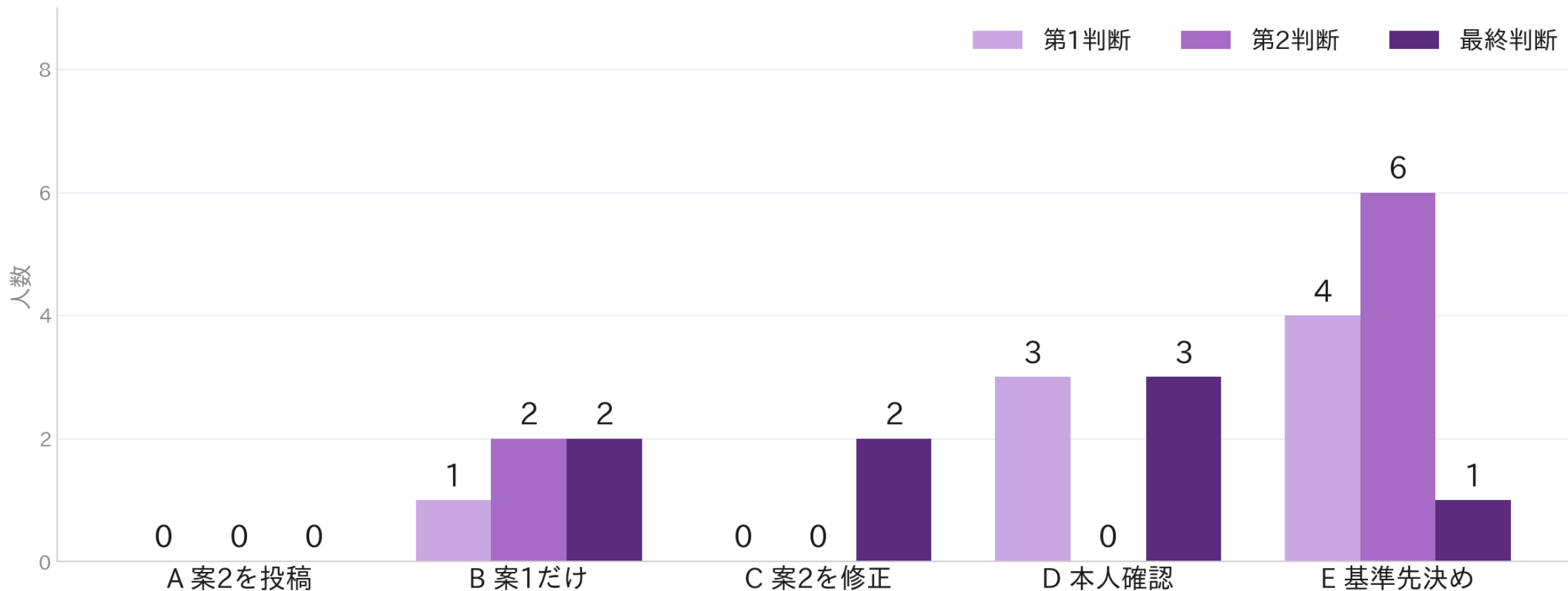


第1回の結果(n=10) 判断はどう動いたか

削除/保存の二択ではなくなった。原本保持と教材化が分かれ、条件設計の方向へ動いた。



第2回の結果1(n=8) 判断の動き方



DとEに割れた状態から、Eに収束し、最終的に再分散した — これは判断の精緻化である。



第2回の結果2 全員が一致したこと

最も重要だと思った概念

学校公式SNSとしての責任

8名(全員)が選択

全員が必要と答えた行動

公開前に本人へ動画を確認してもらう / 投稿後の修正・削除基準を先に決める

責任は重要。

ただし、責任と本人確認だけでは答えが出ない場面が、今日の事例である。

※ 一方で、再生数を成功指標にする/サムネを驚き顔にする には1~2名のみ賛同。



第2回の皆さんの声

1 「動画」が「伸びる」、「学校の情報」が「伝わる」。主語が違う

メディアの主語を見極めるという発想が、皆さんの中に芽生えている。

2 伸びる ≠ 伝わる

伸びるとは再生回数が増えること、伝わるとは作成者の真意が誤解なく理解されること。

3 ネットに上げたものは消せない

公開後の取り扱いまで含めて、判断する必要がある。

4 学校としての責任は難しい

判断を早くしなければならず、いろいろな見方をしなければならない。

「主語が違う」という発想を、今日は別の場面に持ち込みます。



今日は何を中心にするのか

3つの切り口を比べて、今日の中心を見定めます。

1

情報社会の授業: Society
5.0、教育データ、プライバシー

2

この授業: どう残すか、どう
見せるか

3

今日: 記録・編集・生成、真正
性、表示

という3つの切り口を、今日は次のように位置づけます。

「情報やメディアそのもの」を、
今日は「生成」の側から捉え直します。



今日を中心問い

生成AIで補った映像を、
どこまで「学校の歴史を伝える映像」として使ってよいのか。

「本物らしい」ことと、
「本物として扱ってよい」ことは、同じなのか。

(今日の問題)



事例1

事例1

A高校は、創立100周年記念展示の最終日に来場する卒業生のため、学校史映像を作ることになった。

最高齢の卒業生Hさん(98歳)は、1944年に学徒動員で校舎が軍に接收された時期を語り残したいと希望している。

問題は、当時の写真が空襲で全て失われていることである。

案1:Hさんの語りだけを音声で流す。映像は黒画面に字幕。

案2:Hさんの語りに合わせて、生成AIで当時の校舎を再現映像として加える。

Hさん本人にも見せ、「これでいい、こういう景色だった」と確認を得ている。

学生「文字だけでは若い来場者に伝わりません。Hさんの記憶を残すには映像が必要です。」

あなたが担当教員なら、どう判断しますか。



Googleフォーム 1

1人で判断してください。理由と確信度も入力してください。

入力

第1判断 A~E
確信度 0~10
理由の記述
最も優先したもの

選択肢

A 案2をそのまま使ってよい
B 案1にすべき
C 条件付きでよい
D 表示・基準を先に決める
E 判断を保留したい

話し合わず、まずは1人で考えてください。あとで考えが変わって構いません。



話し合い 1

- 1 誰が得をするか
- 2 誰が不利益を受けるか
- 3 本人が確認しているなら、それで十分か
- 4 「分かりやすい」と「本当にあった」は同じか
- 5 古写真のカラー化、アニメ化、生成再現は同じか
- 6 まずは全員が1回ずつ話す



5つの軸で整理する

- 1 記録性: 実際に残っている資料にどれだけ依拠しているか
- 2 編集性: 実在資料の見せ方をどこまで変えているか
- 3 生成性: 撮っていない場面をどこまで作っているか
- 4 表示性: AI関与や再現であることが受け手にどの程度分かるか
- 5 追跡可能性: 何を使い、誰がどう作ったかをどこまでたどれるか



事例2

事例2

試写を見たHさんは涙を流し「これで自分が見てきたことを伝えられる」と喜んだ。
しかし試写には他の卒業生も同席していた。

戦中卒業生のIさん「校舎は似ている。でも、当時の生徒はもっと痩せていた。生成映像は当時の『苦しさ』を消してしまっています」

地域の戦争史研究者「この映像が独り歩きすると、後世の人が当時の実写と誤解する可能性がある」

「学校史の枠を越えて、戦争記録として扱われてしまうかもしれません」
制作班は当初、最後に小さく「一部AI生成を含む」と入れる予定だった。
本人がよくても、本人以外への影響は別問題なのかもしれない。

あなたなら、ここで何を変えますか。



Googleフォーム 2

追加事実を踏まえて、もう一度判断してください。

入力

第2判断 A~E
確信度 0~10
何が最も変わったか
「本物らしい」と「本物」の違い

問い

本人確認だけでは
足りないと感じた点はあるか

生成再現映像は、
何を伝えられて、何を伝えら
れないか

本人確認だけでは足りない、と感じた点があれば必ず書いてください。



今日を中心概念

概念	説明
本物らしさ	本当にあったように見えること
真正性	出どころと制作過程を追えること
プロベナンス	誰が、何を使い、どう作ったかの履歴
表示	生成・補完・編集の関与を、受け手に分かる形で示すこと

本人の確認 — 本人がよくて、
本人以外への影響は別問題である。
今日の核心はここにあるのです。



技術と制度の現在地

学校で生成AIを使うなら、
何が求められているか。

ガイドラインに書かれている要点:

- 人間中心 / 透明性 / 関係者への説明
- 個人情報・プライバシーへの配慮 / 安全性と公平性
- 生成部分や制作過程の表示

教師は「使うか使わないか」ではなく、
「何のために、どう使うか、どう示すか」の判断を求められる。

出典: 文部科学省「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン」 Content Credentials / C2PA



事例3

事例3

展示は3日後。Hさんは展示当日のスピーチで「映像と一緒に話したい」と望んでいる。
校長「Hさんの希望を尊重したい。ただし、画面内に常時『AI再現映像』と表示し、司会が事前に説明することで対応できないか」
しかし制作班から問題提起があった。
「常時表示すると、Hさんの語りの力が伝わりにくくなります。それは、Hさんが伝えたかった経験ではないかもしれません」
別の教員からは更に別の意見。
「そもそも、これを学校が『公式映像』として残すべきなのか」
「Hさん個人の語りとして、別の形で記録すべきではないか」

表示と効果のトレードオフを、どう扱いますか。



最後の発問

- 1 本人の希望と他者への影響、どう両立させるか
- 2 表示を強めることと、映像の力、どう両立させるか
- 3 記録・編集・生成をどう使い分けるか
- 4 どの資料を入力に使ってよいか
- 5 どの誤解であると許容できないか
- 6 学校公式として残すことと、別の形で残すことの違いは何か



グループの最終方針案

- 1 目的・想定視聴者
- 2 記録・編集・生成の使い分け
- 3 本人と本人以外への配慮
- 4 表示・説明・追跡可能性
- 5 誰が確認するか / 問題時の対応
- 6 成功の指標 / 表示強化・差し替え・公開停止の基準



発表で見たいこと

- 1 本人の希望と他者への影響を、両方とも扱っているか
- 2 表示と映像の力のトレードオフに向き合っているか
- 3 記録・編集・生成を区別しているか
- 4 元資料への配慮(個人写真など)を入れているか
- 5 公開後の修正・差し替え・停止の判断基準があるか
- 6 5軸を理由に使えているか



Googleフォーム 3

最終入力です。じっくり書いてください。

入力

最終判断 A~E
行動評価 / 最終方針
最も重要だと思った概念
本人確認だけでは
足りないと感じた点
まだ迷っている点

ふりかえり

第1回・第2回と比べて
新しく見えたこと

高校「情報 I」で扱うなら、
どんな問いと成果物にするか

自由記述

高校情報 I の授業設計まで踏み込んで構いません。



今日のまとめ

- 1 情報技術の発展は、表現の速さや見栄えだけでなく、「本物」の条件を変える
- 2 記録・編集・生成は同じではない
- 3 本物らしいことと本物として扱えることは同じではない
- 4 本人がよくても、本人以外への影響は別問題である
- 5 学校が扱うなら、真正性・表示・追跡可能性・他者への影響を設計する必要がある

情報技術は、何を本物として扱うかも変える。

